

古座町田原の畦なし田

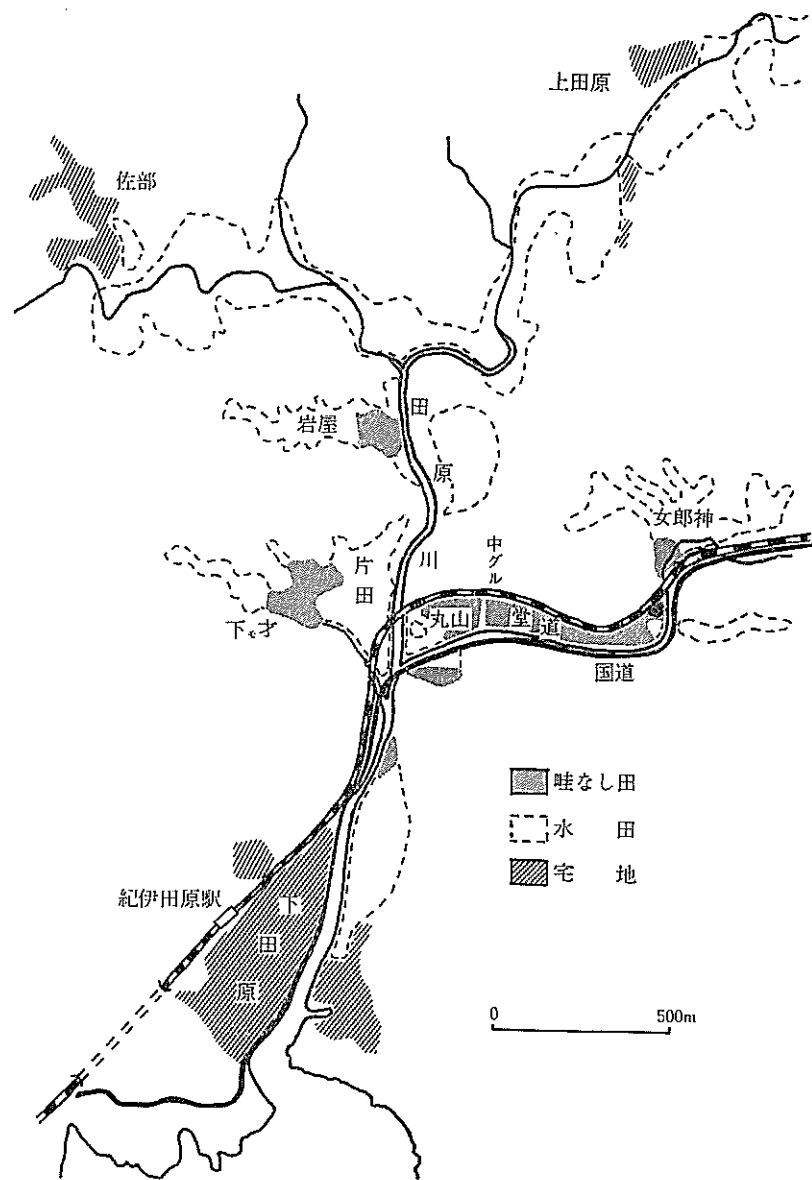
田 中 耕 司*

1. 畦なし田の所在 本州最南端の串本駅から列車に乗り東へ向かうとやがて隣町の古座町に入る。姫、古座、紀伊田原の各駅をすぎて古座町東部にさしかかると、列車は海岸線を離れて谷あいを走るようになる。注意深く車窓から景色を眺めている乗客なら、そのうちに奇妙な水田が現れるのに気づくはずである。列車の進行方向右側の谷あいに細長くひろがったこの水田には畦畔がまったくなく、代わりに棒杭が田面に無数に並んでいるだけである。これが、通称「田原（たわら）の畦なし田」と呼ばれる水田である。

古座町田原地区は、同町東部、田原川に沿う下田原と上田原およびその支流沿いの佐部の3大字からなり、昭和31年の町村合併まではこれら3大字で田原村と称した。下田原は海岸部に位置してかつては農業と漁業を、上田原と佐部は農業を主たる生業としたという。明治22年に3大字が合併して田原村を組織した当時は、人口1,812、戸数440、水田面積約130haを数え、その名のとおり水田に比較的恵まれた地域であった（昭和50年調査では人口1,403、農家戸数186、水田面積約50ha）。現在、水田は田原川およびその支流沿いの沖積地にひろがり、上流部の上田原や佐部では比較的乾田が多く、下田原では、田原川が両側の山地に挟まれたその上流側の谷底（堂道や下オの谷）に湿田が多い。「田原の畦なし田」と呼ばれる水田は、これら湿田のうちでももっとも泥の深い、堂道、丸山、片田、下オ（しもしゃえ）、女郎神（以上は下田原）や岩屋（上田原）の各小字に分布する。

2. 「フケ」 畦なし田は田原では「フケ」と呼ばれる。水田は畦畔によって区画されず、1~2m間隔で田面に突きだてられた棒杭の列で境界されている。棒杭は50cmから1m程度の長さで、上部10~20cmほどが田面に出ている。第1図に田原地区での畦なし田の分布を示したが、例えば小字堂道の水田の場合、谷の東奥から「中グル」と呼ばれる農道までの長さ約400m、幅50~80mの水田にはまったく畦がなく、全体が1筆の水田といってよい状態を呈してい

*たなか こうじ、京都大学東南アジア研究センター



第1図 古座町田原の畦なし田の分布

る。岩屋や下_ニ才の畦なし田も同様である。これら「フケ」はいずれも田原川本流の自然堤防によってせきとめられた支谷に、粘土やシルトおよび植物遺体が厚く堆積した排水不良の強湿田である。沼地状を呈しているため畦畔の造成が困難で、たとえそれを作ろうとしても風波がたつと崩れてしまうという。畦をつくらないで棒で境界するのは、そんなわけで、もともと畦をつくりようがなかったからともいう。

田原地区の水田はその乾湿の程度によって「フケ」、「中ブケ」、「アゲ田」あるいは「ムギ田」の3種に類別される。「アゲ田」のうち田原川沿いの比較的高みにある水田をとくに「川ブチ田」と呼ぶこともある。「フケ」は前述した畦なし田で、ひとが入ると膝から腰や胸までつかかる深田である。「中ブケ」は湿田ではあるが牛を入れて耕耘できる田、「アゲ田」は牛耕が可能で裏作麦の栽培できる乾田である。膝や腰まで泥につかりながら行われる畦なし田の作業は、昔も今もそうかわらないという。牛耕の可能な「アゲ田」にくらべて、「フケ」の作業はすべて人力で行われねばならず、田の中を移動するのもままならないため、仕事は非常にきつかった、と古老達は語ってくれた。

3. 「フケ」 古老達から聴取した昭和30年頃までの「フケ」の作業を「アゲ田」のそれと比較しつつまとめたのが第1表である。「フケ」と「アゲ田」の作業を比較してわかるのは、田植えののち刈取りまでの本田期間の作業が「フケ」では非常に少ないことである。たしかに、本田準備や田植え、刈取りなどは泥につかっての重労働であるが、いったん植えおわると刈取りまではきわめて「粗放的」な栽培が行われている。また本田準備をみても、「アゲ田」の周回作業に対して、「フケ」の場合は、田植え直前に簡単に済ませれば事足りているようである。

この点に関連して、「フケ」の耕作者達は次のように語ってくれた。「フケの米は作り易い。肥料をたくさんやってもアゲ田のように倒れることはない」、「フケの田は手が抜ける。手を抜いても、アゲ田とあまりかわらない。反当2、3石は充分に穫れた」、「隣の田の出来を心配する必要がない。アゲ田なら隣の田がたくさん穫ればこちらも頑張らねばならず、仕事が競争のようになるけれども、フケでは誰の田もほぼ同じ程度なのでそんな心配がない」などである。

「アゲ田」や「中ブケ」の田では、耕耘機の導入によって現在の作業内容は第1表のものすっかり変わっているが、「フケ」の作業はほとんど変わらずにそのまま続けられている。ただ、排水改良工事によって以前より随分浅くなった堂道の畦なし田では、小型の芝刈機に回転刃を装着させた作業機

第1表 「フケ」と「アゲ田」の稲作作業

	フ ケ	ア ゲ 田
本田耕起	浅い田：4月～5月、備中鋤にて株うち・耕起(タウチ)。田植前に手で均平(シルスル)。 深い田：田植前に手で株を埋めて均平(シルスル)。	刈取後秋耕(アキタヒキ)。3月中旬から春耕(クレカエシ)。水入れののちアラカキ(起耕)、下畦塗り。2番犁(コナシビキ)、3番犁(ナカビキ)ののち上畦塗り。4番犁(シロタヒキ)ののち仕上げ起耕(シルスル)。
苗代播種	4月播種。短冊(ケズミ)苗代、平畦。苗代は水がかりのよい乾田に捨える。播種量1反3升播き。	同 左
田 植	6月中～6月下、苗厄(播種後49日目)が済んでから移植。目分量で正条植え(後退)。植付間隔45×45cm。1株苗数乾田の約2倍。浅い田はスジツケで移植する方法が導入される。	6月初～6月中、苗厄が済んで移植。正条植え(後退)。植付間隔35×35cm。1株苗数約3、4本。昭和30年頃からスジツケで田面に平行あるいは格子状に線をつけ、前進植えの移植法にかわる。
施 肥	元肥：乾田の約1.5倍量を施用。 追肥：手間がかかるので省くことあり。	元肥：シロタヒキの前に施用。化学肥料導入前は豆粕、魚の煮汁などを施用。 追肥：2番草のあとに窒素肥料あるいは干鰯類。
除 草	出穂前にヒライグサ。手間がかかるので省くことあり。	1番草(田植後10～20日頃)、2番草(1番草の約10日後)を除草具(クサカキ)で、3番草(ヒライグサ)を手で行う。
刈 取	9月下～10月下、刈取後すぐにタバソで結束。田舟で架場へ運び出し、架(サガリ)干し(水切りのため)。その後、浜や道路で地干し。	9月下～10月下、刈干し後タバソで結束。ニオに積み、翌日、浜や道路で地干し。
そ の 他	深い田では移植時に桑の枝や雑木の束を埋め足場とすることもある。	

で田を耕す農家が多くなっている。しかし、この場合も田の表面を軽く掻き回す程度で本田準備が終るので、「フケ」の本田準備が「アゲ田」などの作業と較べて簡単に済まされていることはこれまでと同様である。水田は浅くなったけれども畦を作ろうという気運はまだみられない。上流側の数筆の田が畦畔板や手畦で囲まれるようになっただけで、畦は喧嘩のもとになるのでいまのままで充分だというのが大半の耕作者の意識のようである。

腰までつかる泥田の重労働にもかかわらず営々として「フケ」の耕作を続ける農民像から、艱難辛苦をもともせず先祖からの水田を守ろうとする百姓魂といえるようなものがイメージとして容易に浮かびあがる。たしかに、いまなお畝で耕し、腰までつかって田植えをする姿は、見る者にそういった気持を抱かせるに充分な重労働である。しかし、畦なし田という特殊な水田が田原に残ったのは、どうもそういった農民の血と汗の結晶といったようなものだけではなさそうである。もっと別の要素があったのではなからうかと考えるようになったのは、調査を進めるうちに前述したような「フケ」の耕作者の話を聞くようになってからである。

4. 踏耕との 関連

わたしが畦なし田の調査をはじめようになったのは、日本の水田農耕と東南アジアのそれとの間に類似点や共通点がないだろうかという問題意識に出発した、国内での共同調査がきっかけであった。その調査には、紀南地方の「田掻き」（耜を牽いた牛数頭を水田内で競走させ、牛や勢子の技術を競う競技）の調査も含まれていた。すなわち、田掻き競技と東南アジア島嶼部で現在も行われる牛の踏耕（複数の牛に水田を踏ませて耕耘する方法）との間に、遠い昔の技術伝播の痕跡を探りうる何かがあるのではなからうか、という少々突飛な発想が田原地区で調査をはじめた理由であった。田原では古くから田掻き大会が催され、大戦後の一時期までそれが継承されていたからである。調査を進めるうちに、田掻き競技が近世期に村人の田植え後の娯楽として紀南一帯に流行したもので、踏耕とは何の関係もないことがわかってきた。そんなわけで、当初の目的は達成されなかったけれども、いわば副産物として畦なし田に接することとなったわけである。

はじめは、こんなに深い田でイネをまだ作っているところがあったのかという驚きと、水田に畦がないという珍しさに興味が湧き、聴取調査を行なった。泥田でのイネの栽培法やその苦労談などを書きとめておこうという気持からである。しかし、調査を重ねるうちに、この「フケ」を耕している人達は、こちらが想像するほどにはこの作業を苦にはしていないように思えてきた。また、この田をもっと耕作しやすい田に変えようとする労働や資本の投入・蓄積にもさほど情熱を傾けてはこなかったのではなからうかと感じる

ようになったことは、すでに述べたとおりである。

5. 漁撈民 の水稲耕作

いまわたしは、すでに珍しくなった深田の作業を書きとどめようという気持から、田原の「フケ」ではなぜ畦が作られなかったのか、なぜ乾田化の方向へと進まなかったのか、という疑問へと関心が移ってきたようである。この点に関連して、「フケ」の田を耕す人達は多くは漁業でも生計をたてる下田原の人達であったこと、また、佐部や上田原にくらべて下田原ははるかに人口が多く、耕地が細分化されていたことが重要ではないかとさしあたり考えている。漁撈をなりわいとする人達が海岸部の低湿地を開墾して水田耕作をはじめ、定住のための基礎を築く。しかし、その水田耕作は生活の糧をもたらす唯一の源ではないだけに、集中的あるいは共同体的な労働投下によって土地基盤の向上をはかろうとする契機をもたらすまでには至っていない。

いまのところ、田原の畦なし田はそんな印象をわたしに与えているのである。そして、その印象は、今日的に進行している東南アジア島嶼部低湿地の水田開墾とそれを担う漁撈民や Seafarer の定着過程ともオーバーラップして、畦なし田の調査も、副産物とはいえ、当初の目的からあながちかけ離れていないのではなからうかとひとり合点しているのである。